

『被差別部落の大学卒業者の進路と結婚』を読んで 運命論を越えとりくみ 選択する主体となるために

土肥いつき

(京都市立高校教員)

十月頃、京都部落問題研究資料センターから、大きめの封筒が届いた。中には『被差別部落の大学卒業者の進路と結婚』と「感想を含めた紹介文を書いてほしい」という手紙が入っていた。さて、どうしたものか。はたして自分に書くだけの力があるか(というよりも明らかに力はない...)と思っただが、これもひとつのチャレンジの機会と思い、書かせていただくことにした。

まずは概要から

『被差別部落の大学卒業者の進路と結婚 転換期における追跡聞き取り調査を通して』(以下、今回調査)と題する本書は、一人一人の被差別部落出身の大学卒業者への聞き取り調査をしたものである。調査は二〇〇六年の七月から十月にかけて実施された。

調査対象者の年代は、おおよそ下の表の通りである。この一人一人

の抽出は、一九九八年に行われた大学進学を達成した被差別部落出身の若者への調査で対象となった一五人がもとになっている。なお、この調査結果は、翌年『被差別部落の大学生にみられる進学達成要因(以下、前回調査)』と題する調査結果にまとめられていて、本書の巻末に補論として収録されている。

生まれ	1976年～1979年
小学校入学	1982年～1985年
中学校入学	1988年～1991年
高校入学	1991年～1994年
大学入学	1993年～1996年
就職活動	1998年～2001年

この一五人の抽出方法は以下の通りとなっている。
1、京都市内の同和地区内に設置されている学習センター(九地区)の指導主事から一人～二人推薦してもらおう。ここで二二人を選出。
2、残り三人は、属性や地域性が多様になるように調査者が選出する。

この一五人から「今回調査」のための連絡がとれた二人を対象とし、さらにプライベート保護の観点から一人外し、残り一人が抽出されている。以下、この一人、あるいは「前回調査」の一五人を総称する時は「協力者」と呼ぶことにする。

バランス的に学習センターへの親和性が高い人が多様な気がするし、「残り三人」が大学教員等である調査者による選出という意味でも、学校文化への親和性の高い人が選ばれているように思う。しかし、大学進学を達成する人は、そもそもそういう属性を持つていてであろうから、それもあたり前と言えはあたり前なのかもしれない。

この一五人から「今回調査」の調査項目は大きくふたつにわかれる。ひとつは、「大学生活と進路選択」、もうひとつは「卒業後の生活と部落とのかわり」となっている。前者については、さらに「大学生活」「就職選択とその支援、現職への評価」「大学進学(生活)への評価」という項目が並んでいる。また、後者については「結婚の過程における部落問題の乗り越え方」「部落問題との向きあい方」という項目が並んでいる。

一読して
とりあえず、「今回調査」の第

一印象を、本書の項目にそって書いていく。

大学進学と進路選択

協力者たちの大学生活の第一印象は、まずは「普通やん」だった。このことは、本書の「おわりに」にも以下のように書かれている。

「まず、彼らの大学生活は、特別なものではなかった。アルバイト、クラブ活動、勉強などに、それぞれが自分の興味関心に基づいた、充実した大学生活を過ごしている。いわば、「普通の生活」を送ることができた(後略)」

これは、大学生活だけではなく、その後の就職選択についてもそうである。もちろん、個人個人の家庭的事情や考え方の違いによる紆余曲折はあるものの、全体としてはとりわけバブル崩壊後の時期の就職としては、驚くほど「普通の」就職をしている。こうしたものを裏づけているのが、大学進学・大学生活への評価である。語りから引用する。

「大学入ってよかったし、職業の選択の幅が広がった。今は、大学出ないと、いろんな職業あたってみたわけではないのでわからないですけど、やっぱり大学でとかないあかん。(広岡)」「いろんな人を見たのと、いろんな各地方から来てはるし、こういう世界があるんやな」というのを見たんで(山

川)「

職業選択の拡大と人間関係の拡大は、まさにわたし自身が大学に行って感じたことであり、それにもとづいて、いま子どもたちに話していることと同じである。そして、部落の中にはそうした価値観、中でも人間関係の拡大という価値観が欠落していることも、協力者たちは語る。

「大学に行かなくても立派に仕事をしている人もいるので言えないですけど、…般に閉じこもったまま、言わなくても分かる相手とだけ固まるのは止めてほしい。環境も生活スタイルも全然違う人がいることを分かった方が良い(藤田)」

こうした部落問題への意識をもつ少し掘り下げたのが、次の節「卒業後の生活と部落とのかかわり」での語りである。

卒業後の生活と部落とのかかわり

ここではまず、結婚の過程で出会った「個人的な」部落問題とのかかわりについての聞きとりがある。聞きとりが紹介されているのは、全部で九人。うち六人が既婚で一人が間もなく結婚することと。また、これら七人の相手は、全員部落外とのこと。そして、結婚した(する)七人全員が、なんらかの形で自分が部落出身であることを「軽く」相手に伝えている。

「軽く」というのは、そのことをめぐって十分な話し合いをする必要がなかったということのようである。その理由のひとつは、相手が部落問題のことを理解してか知らずかはともかく、そのことが問題にならなかつたからのものである。

「で、結婚する時に、部落出身なんやけどっていう話はしましたね。『あ、そう』という感じでした。(中略)(相手の両親にも)一応ちゃんと行ってほしいって言ったから、『わかった』で、『言いたよ』って、それだけで。それについて相手の家の人からの話もなく。一切ないです。(下山)」

もうひとつの理由は、自分自身の被差別体験の稀薄さにあるのではないかと思つた。

「僕が、それまでに部落差別を受けているのであれば、けっこう反発力が強い方なので部落問題に愚痴半分でアーダコーダ説明すると思うんですけど、僕自身は差別を受けていないけど、その差別は存在している、としか知らない状況だから何を伝えようか、という感じですよ(藤田)」

一方、結婚した(する)七人以外の二人の語りは印象的だった。「結婚するのは困るなって言つた子はいない。しかも、ちょっと付き合いかけになつていた子で、

『なんで?』って聞いたたら、『俺だけの問題じゃないやん。結婚は家の問題やし、(中略)』あ、もうこの人は無理やと思つた。そんなやつを尊敬して好きでいつづけれへん。人として、男として君アウトと思つた(加藤)」

協力者たちは、部落問題についての学習を積む中で、あるいは、両親や親戚の体験を知る中で、結婚に際して差別がありうることを全員が認識している。「それはもう怖いというか、どういふことがあるのだらうという不安はあるんですけど(森村・前回調査)」という漠然とした不安を感じながらも、だからこそ逆に「話さなければならぬ内容である」ということもまた、もともとから感じていたようである。しかし、その「話さなければならぬ」理由は、認めて「もらう」ためではなく、それを試金石としながら、相手の人間を評価するためである。言うならば「選ばれる存在」ではなく「選ぶ存在」であるということになるだろう。こうした意識の背景には、言うまでもなく協力者たちの「部落問題との向きあい方」がある。結婚差別を受けた母親を持つ森村は次のように語る。

「私が部落出身やつていって、あつこつという人もいるんだと思つてもらつたらいいかな。なるべく

なら差別受けたくないやんと思つてですよ。受けたくないからつて言つて周りを変えるんじゃない、自分が変わりたいと思つて。意味の分からないことで差別受けたくないですよ」

「選ぶ存在」であることは、就職においても同様である。就職試験で自分の部落出身を積極的に話すという大谷は次のように語る。

「どつかの面接の時に、小学校、中学校、高校のときに、そういう施設に行つて同和問題のこと勉強しましたつて言うたんです。そして、どつかの会社でそれはあんまり言わないほうがええつて言われて。でも僕はそうやって同和問題の勉強をして、他の人はあんまりしてないじゃないですか、それをプラスの意味で言うたんですけど、逆にマイナスになつてたのかなと。それは言われたことあります。案の定落とされてますけど、その会社は。意外ですね。でも僕は次のところでも言うてました。止めるつもりはなかつたですね」

部落問題について、小さい時から家庭で、学校で、センターで学習してきた協力者たちは、大学生になつて「外の社会」を知る。「外の社会」と「ムラ」を比較し、「ムラ」への批判点も持ちながら、一方「自信」に裏打ちされる中で、このような語りが出てきたのでは

ないかと思つた。
作業してみた

と、とりあえず読んでみたのであるが、途中からだんだん「普通じゃないよ」という気がしてきた。協力者たちは、あまりにも「しつかり」している。いったいどうすればこんな子が育つのだろう。とりわけ高校教員である自分としては、高校という現場でどのようなかわりをすればいいのだろう。そのことがすごく気になつてきた。

わたしは、勤務校の校区にある部落の中で、教員になつて四年目から約一五年間、隣保館学習会にかかわつた。その中で、たくさん子どもたちと出会つてきた。一九九一年に高校に入学した今回の協力者たちは、まさに、わたしが担任としてかかわつた世代である。しかし、この本に出てくるような子どもたちと出会うことは、ほとんどなかった。そこで、補論として収録されている「前回調査」を読むことにした。

表にして「謎」が解けてきた。ここからは、単純に「データ」に基づいた感想になるので、少々うがった書き方になることをご容赦いただきたい。

一人のうち、公立 類はわずか二人。私立A（大学進学を前提としない学校・コース）に行つたのがたった一人。残りの八人は、私立B（大学進学を前提とする学校・コース）か公立 類への進学をしている。つまり、わたしがここに登場しているような高校生に会わなかつたのはあたり前、わたしの勤務校にはほとんど来ない子たちばかりだったということのようだ。

また、こうした学校・コースは地域性が稀薄であることが多い。協力者たちの語りの中に、高校での同和教育のとりくみがあまり聞かれないうちもつなずける。

親の職業欄を見ると、見事に「公務員」が並んでいる。協力者たちが高校へ大学時代には、まだ解放奨学金があつたことを考えると、高校・大学ともに私立が多いこともつなずける。

これらの体制が進学に向かつてい

るからであろう。センターについては、小学校ではほぼ全員が利用している。中学校でも「時々利用」を含めるとほぼ全員。さらに、高校でも一人一人がなんらかの形で利用している。わたしの経験では、高校に進学した時点で隣保館学習会に来る生徒数が激減し、来ていたのは「進級保障」のために強制呼び出しを受けた子だった。まったく反対である。

これらのデータだけを単純にくつ

つけると、大学進学の外的要因は次のようになる。

- 1、親の経済的な安定
- 2、奨学金の存在による学業への経済的な裏づけ
- 3、学習センターの利用による高校入試への対応
- 4、「進学系の高校」に行つたことによる学力保障と価値観の変化

1、3は施策そのものである。4については、もちろん個人や家庭の努力の結果である。しかし、それを裏づけるものとして施策が大きく影響していることは言うまでもない。

ジェンダー・セクシュアリティをめぐって
もうひとつわたしが感じていた違和感・とまどいは、本文中の表

にジェンダーが書き込まれていないことだった。ジェンダー抜きに就職・結婚を語ることはできないと、わたしは思う。実は、表を作成する際、真つ先に行つたことが、本文中からジェンダーにかかわる記述をもとに、ひとりひとりのジェンダーを書き込むことだった。

まず注目したのが、現在の仕事の欄との関係である。非常勤四人中三人が女性である。ただし、研究職（藤田・男性）という特殊な職業と常勤の内定者（加藤・女性）を除くと、純粹に非常勤であるのは女性二人だけということになる。

子育て・地域活動・保育園の保護者会活動といったいわゆるアンペイドワークに積極的にとりくむ水田と、「地域の謎のお姉ちゃん」として学習センターの講師やスクールサポーターをしながら、かたや創作活動にはげむ森村。ともにすごく魅力的な生き方であると思いつながら、なんとも言えない居心地の悪さが、わたしの中にあることも否定できなかった。

非常勤の二人は次のように語っている。

「うちの親も、就職しろつて（きつく）言わなかつたし（水田）」
「親に事務員になればいい。勉強はしなくつていいって、ずっとそれを聞いて育つたんで（森村）」
もうひとつジェンダーとの関連

旧	名前	性	家族	父	母	認識		高校	家庭教師・塾			センター			大学	専攻	key	仕事		結婚
						運動	誰から		小	中	高	小	中	高				職種		
A	小林	M	A	-	中卒(失対)		C	公立						私B	文系	P	常	教員		
C	川井	M	B	中卒(公務員)	高退(公務員)	父	P	私立A						私B	文系	T	常	公務員		
D	水田	F	B	中卒(公務員)	中卒(公務員)	母	P	私立A						私B	文系	P	非	組合事務		
E	大谷	M	B	高卒(元職人)	中卒(無職)		-	公立						私A	文系	姉	常	銀行		
G	森村	F	A	高卒(公務員)	高卒(公務員)	母	P	私立A						私B	芸術	PT	非	教員 スクールサポーター		
I	下山	F	B	高卒(公務員)	高卒(公務員)	母?	PC	私立A						私A	文系	P	常	事務		
J	大木	M	B	中卒(公務員)	高卒(公務員)		P	私立A						私A	文系	T	常	教員 バイク		
K	藤田	M	B	高卒(公務員)			-	公立						国(D)	理系	PT	非	教員? 研究		
L	広岡	F	C	大卒(教師)	大卒(教師)	両親	P	公立						国	文系	PT	常	教員		
M	山川	M	C	大卒(自営)	高卒(無職)	父(地域)	-	私立B						私定時	文系	P	常	自営(家業)		
O	加藤	F	C	大卒(公務員)	高卒(公務員)		P	私中高						私A	文系	P	非	教員(高校時代芸能)		

「誰から」や「key」にある記号について：Pは親、Cはセンター、Tは教員をさす

で着目したのが、高校でのセンター利用との関連だった。がついてくる女性はゼロである。女性五人のうち一人は、中学校段階で私学に行ったためにセンター利用がなかったとしても、かろうじて「時々利用」が残り四人中二人。これをどう考えればいいのだろう。残念ながら、「前回調査」の中で高校時代のセンター利用者として紹介されているのは全員男性なので、「語り」からその理由を知ることができない。しかし、前述のような親の考え、ひいてはムラの中にあるであろうジェンダーバイアスに対して、センターの側に女性を特に「プラスアルファ」して支援するという発想は、おそらくなかったのだろう(なお、センター利用が小学校のみである森村は、大学に行く内発的な理由として「女性であることと部落であることで差別されていくのに、学歴差別受けたくないって言うのが大きくて」と語っている)。

一方、教員(関係)四人中三人がやはり女性だった。一人中四人が教員(関係)であり、さらに少しの時期ではあっても教員を考えたものが二人。これは、学校やセンターで出会った教員の影響だろう。そして、その半数を女性が占めるということとは、やはり教員という仕事には男女の格差が少ないということを感じていたのだろうとも思った。

もうひとつ気になったのが、結婚についての語りで紹介されなかった小林と川井である。単にトピックスがなかったのか。それとも、語ろうにも語りようがなかったのだろうか。結婚しないという選択肢もまた存在しているはずであるが、そのことが本文からは伝わってこなかった。

しかし、協力者たち一人一人の語りは、新鮮で、おもしろい。そのおもしろさをどこで感じたのかと考えた時、ふと思いついたのが、在日外国人生徒交流会で出会ってきたダブルの子どもの存在だった。

そう考えると、協力者たちは、ムラ中に生まれ育ちながらも、ムラの価値観と距離をおいている人。ムラに同化しきれない人。ムラに過剰なアイデンティティを持たず、しかしムラの間人間として生きることを引き受けた人。「マージナル」という言葉が浮かんできた。そこで、お手軽に「マージナル 解放教育」でググってみると、部落解放・人権研究所の≒がヒットした。

「マージナル・マンは、自己の内にある文化的・社会的境界性を生かして、生まれ育った社会の自

明の理とされている世界観に対して、ある種の距離を置くことができる。それゆえにマージナル・マンは、人生や現実に対して創造的に働きかける契機をもっている。したがってマージナル・マンは、被差別の立場に追いやられるだけでなく、脱差別の方向を志向する場合もありうる」

協力者たちは口々にこう語る。「団体で動いても無理じゃないですか。(中略)やったら、自分がしっかりしてれば、いちばいいんじゃないかなって(森村)」「それよりは自分に力をつけてほしい。いざ、結婚とかになって、差別を受けるとき、そういうときに、はねかえすだけの力、自分がしっかりしてほしいって、ありますよね(川井)」。

従来の運動が、課題を集約し要求を実現する「大衆運動」であるとするならば、協力者たちは「ピンで立つ」ところからスタートをするという感じがする。従来の運動・施策への距離を置いたこうした語りは、もしかしたら、「強者」のそれかもしれない。そういう語り、運動・施策の「成功例」としての協力者たちから出てくるのは、ある意味皮肉である。

しかし、協力者たちは、自分たちのこうした力が、もちろん家庭や本人たちの努力はあったにしろ、選考採用・奨学金・センターといっ

た施策の裏づけのもとに、大学進学のプロセスと大学生活の経験によって得られたことを充分に認識している。そして、後輩達に「大学へ行こう」と語る。「個人」と「運動・施策」のバランスの上にある、この協力者たちの姿を伝える本書が、いまこの時期に出されたことの意義は大きい。

協力者達に子どもが生まれたとしたら、その子どもたちは、「ムラ」と「ムラ外」のダブルである。「マージナル・マン」たちがどのような子育てをしていくのか、その追跡調査は協力者たちにとって失礼というものだろうか。いや、同和教育の長いとりのくみの中で培ってきた調査者たちと協力者たちとの信頼関係があれば、もしかしたら「その後」を読むことができるかもしれないと思いつつ……。

(竹口等・外川正明・伊藤悦子執筆、京都部落問題研究資料センター発行、二〇〇八年一〇月刊、五〇〇円)

西陣織と朝鮮人

金森 襄作

(運営委員)

昨年の十二月の当研究資料センター主催の連続講座「京都における在日朝鮮人の形成」で、私は、主として土木労働に従事した朝鮮人の京都での定着過程を述べた。それは一九二八年からのことで、市内の一般住宅を貸してもらえなかつた朝鮮人たちが、三条・深草を除く六部落の周辺で貸し出された低級長屋には入居でき、そこで急速に数を増やして、一〇〇〇〇戸の小密集地を形成していった。また、低収入の者が多かったにもかかわらず、家族を朝鮮から呼び寄せ、そこで定着できたのは、その借りた二部屋長屋の一部屋を他の朝鮮人に「また貸し」することによって、住居費を半減させたこととにあった、という内容であった。ところが、一九三〇年代にはこれとは別に、西陣織で働く朝鮮人の数が土木を上回って、京都で一番多い職業になっていったにもかかわらず、この事実に関する資料は少なく、また具体的研究もほとんどない。それは西陣全体からみると朝鮮人の占める比率が、まだ

少なかつたことや、集団密集地を形成することなく散在していたため、社会問題化していなかつたからである。しかし、京都での朝鮮人の定着を考える上では、欠かすことのできない課題であることには違いない。これが、ここで執筆してみようと思つた理由である。しかし、門外漢の私にとつて、少ない資料を丹念に集めて、詳細な研究論文を仕上げる力量はない。ここでは単に、京都市社会課調査報告四十一号『市内在住朝鮮出身者二関スル調査』と同四十四号『西陣機業二関スル調査』を中心に、一部後述する高野昭雄氏の論文を参照しながら、その概要をまとめた簡単な「スケッチ」にすぎず、今後の研究の一つの指針になれば、と考えただけのものである。また、本稿で使つた数値は一つ一つに注釈を付けてはいないが、全て右の資料に依拠している。

西陣織への朝鮮人の大量就労は、世界大恐慌が終わつた一九三二年頃からで、「染色」部門、そして「貸機」へと続き、急速に拡大していった。この外、「撚糸」部門と「ピロード織」(ゲタの鼻緒織)でも見られた。撚糸部門とは、織る着物に合わせて原糸を数本、数十本撚り合わせたり、横糸を棒に巻き取つたりする業種をさすが、西陣全体から見ると職工数が少な

く、論外にした。

「ピロード織」とは「鼻緒織」で、縦糸には強い麻糸を、横糸には肌ざわりのよい綿糸と絹糸を使って、三〇×三〇センチを一反とする織物をさす。資本のかららない小さな織機、そして簡単な技術で容易に織れたため、不況時で着物生産が大打撃を受けた折、当面の「現金稼ぎ」として始まつた様で、その過半数が朝鮮人織手に占められていったという。しかし、全体の職人数も少なく、生産高も西陣織全体の三パーセント程しか占めず、後で簡単にふれる。

本論に入る前に、気になる資料に接した故、あえて触れておきたい。西陣織に多くの朝鮮人が就労したのに対して、部落出身者はほとんどみられなかつた事実である。これに対して「地区の人々は概して心棒心がなく勤勉でない……朝鮮人の方が真面目によく働く」(京都市民生局『友禪染労働者の実態 京都市養正地区における調査』十三頁)と説明している。「部落差別」以外の何者でもない、といえればそれまでであるが、雇用者からすると、生活風習が異なり、言葉も通じない外国人よりも、部落出身者であつても日本人の方を優先して当然だ、とも考えられるのだが、結果は反対であつた。朝鮮人差別も厳然として存在していたのに、何故そつ